

『ミッドナイト・コール』 上野千鶴子 著（朝日新聞社）
『死を考える』 中村真一郎 編（筑摩書房）

中村 弓子

『ミッドナイト・コール』

著者は、この本を書くことによってルール違反を犯した、と「あとがき」に書いている。社会学者として、つねに自分の「私」は棚上げにして、「社会」の問題を分析し「社会」の期待する答えを出すことをルールにしてきたのに、このエッセー集では、「私」としての著者が「社会一般のひとつ」とではなく「私」としての読者に真夜中の電話をするようにひっそりと「私信」を送っているからである。

しかし、この「私信」は、いわゆる「社会的問題」の手前にあると同時に、その先にあるものにも突き抜けており、その意味で、著者の従来のフェミニズム論

とはまた次元の違う普遍性を獲得して、読者に静かだが深い反響をひき起こす。

天安門の学生たちの悲痛な姿を目にして、「全共闘世代」として（私自身も他ならぬこの世代であるが）すべての「負けいくさ」のもたらす外傷と行く末に思いを馳せる「世代体験」。家族から、共同体から、自分を縛るすべてのものから脱出することに成功し、仏教でいう「往相」を得た女性にとつての「還相」すなわち「帰り道」はどこにあるかを問う「往還」。「男の論理」をわがものとしてそれを武器に相手の懐に切りこむという「裏切り」を果たしたために、男の世界でも女の世界でもフリーク（異形の者）となった人間の

孤独と自負を記した「フリーク」、など。

しかし、すでに朝日新聞連載中から、中でも特に強い印象を私に残したのは「老いと死」と題するエッセーだった。

著者が最近「老い」のテーマに関心を持っていると知った人たちから、今度は死について考えてみないかと誘いを受けるとき、著者はそのたびに当惑してしまふ、と言う。「老いと死は、いつもセットで語られるがほんとうにそうだろうか。(中略)生の意味を知らないわたしが、死の意味だけ知っているわけがない。わたしはただ、生きているのに、死ぬ時だけとつぜん意味づけられるのは、まっぴらだ。(中略)そんなわたしは老いについて考えるのは、よく生きるためであって、死に方を考えるためではない。絶対というものを欠いた世界では、五十歩百歩のそのわずかなちがいが意味を持つ。『よく生きる』ためには、五十歩を五十歩にするためにも、考えること、なすべきことはいっぱいあるのだ。」

著者の「老い」に対する関心は、「逆夕暮れ族」の中に「生きものはさかりを迎え、そして衰える。衰えていく生きもののあり方を受け入れる思想を、わたしは何とか獲得したいとねがっている。」とあるように、それはあくまでも「衰えていく生きもの」の問題であって死の問題ではない。しかしこのように老いと死を峻別するところに逆説的に死の在り処が浮かび上がり、「わたしはただ、生きているのに、死ぬ時だけとつぜん意味づけられるのは、まっぴらだ」という著者の強烈な「境界意識」の中に、やはり逆説的に、絶対的、宗教的なものとしての死の意味づけが浮かび上がってくる。葬式仏教を疑問も持たずに受け入れるような心性と、「わたしはただ、生きているのに」と言い切る意識の鮮明さとのあいだにはなんとという距離があることだろう。著者の自己把握のこのような鮮明さと潔さに私は打たれ、そのようなものを出発点としてこそ真の思想的対話も可能になるのだろうと思ったのである。

ところで、このように逆説的に死の意味を考えさせる文章に対して、今度は、正面から死そのものを考えるための本も存在する。

『死を考える』

この本の編者も冒頭で次のように述べている。「一定の宗教的立場、あるいは無宗教的立場を確乎として所有する者でなければ、死についての決まった考えを述べるのは、極めて困難である。そして、現代の日本人の大多数は、私と同じ、ある特定の宗教の熱烈な信者でもなく、又、断乎として唯物論的立場に立つ」のでもない。

序章の「死をめぐるこの回想」に明らかのように、編者自身は現在「宇宙の魂の存在のなかに、自分の肉の消滅と同時に、私の微小なる魂も一滴の水のように溶け入って、永遠の、意識なき平和のうちに消える」というインドの聖者ラマクリシュナの思想に帰依しているにしても、そこに至るまで死と魂の永生の間

題をめぐる長い思想的遍歴をしている。本書は、その思想的遍歴の里程標ともいべき文章を古典から現代まで、編者自身の案内の言葉を添えて収めたものである。だから、読者はこの本を読むことによって、秀れた「死の思索者」である編者とともにみずから「死を考える」ことを促されるのである。

ここには死に対するじつに様々な考え方が記されている。またその中で、ローマのストア派哲学者マルクス・アウレリウス帝の『自省録』の「自然のわざを恐れる者があるならば、それは子供じみている。しかも死は単に自然のわざであるのみならず、自然にとっても有益なこともあるのだ」というような思想が、時代も文化圏も異なる道元の『正法眼蔵』の「生きたらばただこれ生、滅来らばこれ滅にむかひてつかふべし。いとふことなかれ、ねがふことなかれ」というような思想と響き合ったりもしている。また同時に、プラトンの『パイドン』は「魂は不死にして不滅なるものであり、そして、われわれの魂はほんとうに、ハデ

スにあって存在をつづけるのだ」と魂の永生を声高らかに主張し、スペインのキリスト教神秘主義の聖テレジアの詩「配所の嘆き」は、地上の生活を「配所」と見て、「あなたに会うために／私は死にたい」「私をここから出してください／あなたに会うために」と歌う。

また、ガン患者としての限界状況の中で宗教学者岸本英夫は『わが生死観』の中で、「死というものは、そのものが実体ではなくて、実体である生命がない場所であるというだけのことである」と自らの達した認識

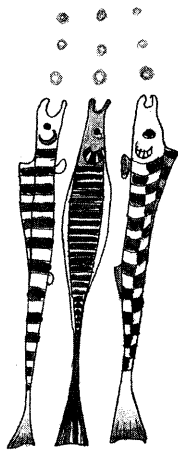
識を記している。

「死について考えるには、現代生活においては余程の時間的な贅沢が要求されるのである。働いている人の大部分にとっては、死は他人に起こる事件に過ぎない」と編者も言うが、にもかかわらず死は、言うまでもなく、私たち一人一人にとって決定的なことからある。古来の銘句「メメント・モリ（死を想起せよ）」が告げるように、心静かに過ごせる季節こそ死を思索するにふさわしい季節なのではなからうか。

（お茶の水女子大学）

『ウイリアム・モリス伝』

フィリップ・ヘンダーソン 著（晶文社）



皆川美恵子

ケイト・グリーンナウエイ（一八四六～一九〇二）、ウォルター・クレイン（一八四五～一九一五）といっ

た名高い絵本作家が活躍した時代のイギリスでは、自らの内に秘められた黄金を黄金として発揮しようとする人々